

伊豆北条氏の周辺

—時政を評価するための覚書—

野口 実

はじめに

本誌前号に発表した拙論「『京武者』の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―」（以下、前稿と表記する）において、私は伊豆北条氏を取り上げ、その出自や伊豆北条の地理的環境・伊豆国衙周辺の人的環境について近年の考古学の成果も踏まえて考察を加えた。しかし、ここでは先行研究における北条時政の評価についてはほとんど触れておらず、また、出自の問題についても、最近になって中世に成立したことが明らかな北条氏系図がいくつか公表されており、それを踏まえて再考する余地がのこされている。さらに、最近公刊された『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』において、時政の後妻牧の方の出た牧氏とその所領である大岡庄に関する新たな知見が示されることがあり、これを前提にした再検討の必要に迫られることになった。本稿はこれらの課題に取り組むことを目的にしたものである。

一 北条時政に対する諸家の評価

(二) 大森金五郎

近代以降、歴史学者が北条時政を正面からとりあげた研究として先ず第一に挙げられるのは、『武家時代之研究』で知られる鎌倉時代史研究の泰斗大森金五郎による「北条時政の批判」(国史講習会『中央史壇』二(五)一九二二年)である。

大森は「北條氏の事といへば世間では一種暗影が付き纏つて居る様に考へる」と述べ、その理由として、「源頼朝が艱難辛苦して開いた鎌倉幕府を、後に至つては北條氏が種々術策を弄してマンマと之を其の手に収めて了つたといふ事」と「時政が後妻牧氏の言を用ひて畠山氏を倒し、又將軍の弑殺を謀つたこと」を挙げるが、「北條氏に關する非難といふものも、半ばは感情に出で。從來からの大ざつばな史論に基き、史実上の根拠甚だ薄弱な様に思はれるのである」とする。

一方、「頼朝自身は大したものではなくて実は時政の葉籠中の物であつたのであるといふ様に説く者がある」ことについては、これを否定する。しかし、石橋山合戦の後、甲斐源氏との連絡のためにいったん甲斐に向かったが、頼朝の在所が不明では呼応を期しが見て頼朝を追つて安房に渡り、それから再度甲斐に赴いたことに、時政の「用意周到」なることを見出す。また、頼朝が政治上の真実の大事を時政とのみ相談したことや、義経問題に対応するために上洛して、諸事を治めて、離京の際には諸方から惜しまれたことなどをあげ、「北條氏の事は大義名分上から論ずれば、不都合だらけであるが、一族の者何れも之に幹たるの才を有し、政務を理法的に処理して行つて、ムチャな事の割合に少かつた事は武家時代の事としては感すべき事柄である。政子なども貞觀政要を和訳させて政治の資に供したさうで中々凡庸の者では無かつた」と論じ、時政を「敏腕家」と評価するのである。

時政の後妻牧の方については、まず『愚管抄』巻第六の、

時政若き妻を設けて、それが腹に子供まうけ、女多く持ちたり。此妻は大舍人允宗親と云へる者の女也。兄は大岡判官時親とて五位尉になりてありき。其宗親は頼盛入道（平宗盛の叔父）が許に多年使いて、駿河国大岡牧と云ふ处を知らせけり。武者にもあらず、かゝる者の中に、かゝる果報の出でくる不思議なり（大森論文引用のママ）

―野口注―

という記事をあげ、「牧の方の性行については批議すべきものが多い」とする一方、「一体時政の先妻は何んといったか又死別であるか生別であるか」ということと、時政と「牧氏との関係は何時頃からか」はともに不明であるけれども、「兎も角も政子や義時及び畠山重忠の妻、足利義兼の妻などは何れも先妻の所生か、又は妾腹であり、それから平賀朝雅の妻や権中納言実宣及び坊門忠信などの妻は後妻牧氏の所生」という客観的事実を提示している。

また、政子が頼朝の愛人である亀の前に「うわなりうち」を行った事件における牧宗親や時政の行動から、牧氏が勢力を有するほどの存在ではなく、「要するに頼朝の存生中は時政と雖も牧氏と雖も之に推服して居て、未だ我儘を発揮するには至らなかつた」ことを指摘する。

建久四年（一一九三）の富士野の巻狩における曾我兄弟の仇討ちの際、五郎十郎の兄弟が工藤祐経を討取つてから頼朝を窺つたのは時政の教唆に出たのであろうという説については、「此の推測は少し穿ち過ぎた事のように思はれる」と述べる。そして、時政失脚の背景となつた義時・政子と牧の方の政治的対立を実朝の結婚問題に求めて、「義時は其の姪に当たる足利義兼の女を薦めた」のに対して、牧の方所生の女子は京都の公家の間に嫁し、その一

人が坊門忠信の室となっていたことから、彼女が信清（忠信の父）の女を実朝に推薦した事を指摘し、「それかあらぬか牧氏は此の頃から追々手腕を振ふ様になった事が史上に散見して居る」と述べる。

また、時政と牧の方が義時の反対を押し切って進めたとされる畠山重忠の追討について、合戦の後、時政がその模様を義時に尋ねたのにこたえて、義時が重忠の冤罪を語ったのに対し、「時政は之を聞いて一言も発しなかった」ことを指摘する。これと同様に、実朝弑殺の陰謀で牧の方と共に失脚した際、「時政は感ずるところあったと見えて、俄に落飾し当時六十八歳尋で伊豆の北條に下向し、是より全く政界から退隠する事となった」と同情的な筆致を示すのである。

(二) 佐藤進一

戦後における鎌倉時代政治史研究のベースを固めた佐藤進一の「鎌倉幕府政治の専制化について」（『日本中世史論集』岩波書店、一九九〇年、初出は竹内理三編『日本封建制成立の研究』吉川弘文館、一九五五年）は、頼朝拳兵以前における北条時政の評価においても今日の学界において最もスタンダードな見解を提示したものである。

佐藤は、幕府における北条氏の立場を「豪族的領主層の代弁者と考えることができるかどうか」と問題提起し、北条氏の幕政主導権掌握を以て、直ちに將軍独裁制を克服する真の意味の武家政治の確立とはなしえず、また、北条氏の族的性格は東国の豪族的領主層とは相当異なったものをもっていたという見解を披瀝する。そしてその根拠として、①時政が先祖以来の伊豆の在庁であったと伝えられるにもかかわらず、頼朝拳兵当時すでに四十歳を超えて北条家の当主であったのに何の受領もたず、四郎を称していること、②鎌倉時代に活躍する北条氏の一族は時政の子孫で、時政以前に分派した北条氏の庶家庶族については全く知るところがないこと、③後年北条氏被官とし

て政界に君臨する尾藤氏・平（長崎）氏・諏訪氏は古くからの北条氏の家人ではなく、伊豆出身ですらないことをなげをあげる。そして、「少なくとも同氏が幕府創立の軍事的中心勢力となった千葉三浦諸氏のような豪族領主層出身ではなく、したがって族的支配の面はもちろん、種々の面で豪族的伝統の重みを背負っていなかったと言っているのではあるまいか」と結論づけるのである。

（三）上横手雅敬

政治は社会的諸現象の集中的反映であるという見地から、一貫して中世前期政治史に立ち向かっている上横手雅敬が、二十代にしてものした啓蒙的名著『北条泰時（人物叢書）』（吉川弘文館、一九五八年）から、成立期の北条氏に関する論述を取り上げる。

北条氏は多くの系図を比べても、時政以前については相違が多く、保元・平治の乱にも、参加していない。頼朝と政子の間に恋が芽生えて、時政が頼朝を庇護したという話よりも以前に、北条氏のことを記した記録はない。有力豪族の三浦氏・千葉氏等のように一族が多数繁栄して大規模な同族武士団を形成しているわけでもない。このように、武士団としての存在形態から北条氏の特異性を述べる。

ついで、北条氏は東国武士が一般に愚直・素朴であるのに対し開明的・打算的で、思想・行動の上で大変かわつた存在であることを、京下りの有能な官僚大江広元と巧みに手を握ったり、実朝が暗殺された後に、皇族や藤原氏から將軍を迎えようとした非凡な着想から説明し、その際、政子が京都側の首脳と交渉した手腕も、彼女の勝気さからだけでは説明できないと述べる。さらに、「新しい体制が生まれるときには、いつも新旧両体制に通曉した人物が有能さを発揮する」ことを指摘して、北条氏が東国武士としての性格と共に、かなり京都と深い関係にあった

ことを推測し、「伊豆に土着したのもさして古い頃ではなからう」とする。

また、文治二年（一一八六）時政が、京都で盗賊を捕え、検非違使に渡さず首を斬ったことについて、これは違法であるが、盗賊の横行を取締るという目的は、時政のその行為によつてはじめて果されたとして、その歴史的役割を高く評価している。

（四）安田元久

戦後の日本中世史学において、とくに成立期の鎌倉幕府や東国武士団の研究に大きな功績を残すと共に、その成果を市民向けの著書として還元することでも活躍したのが安田元久である。したがって、氏の見解は今日におけるオーソドックスな北条氏認識を構成しているといえる。ここでは、その、まさに一般向けに書かれた『鎌倉幕府の実力者たち』（人物往来社 一九六八年）に収録された「北条時政」を取り上げたい。

安田は先ず、頼朝拳兵に関する「しかれども、真実の密事においては、北条殿の外、これを知る人無し」という『吾妻鏡』の記事を引いて、頼朝が初めから深く信じたのは時政のみであったことを述べる。そして、時政の存在形態について、田方郡四日町北条の附近一帯と推定されるその本拠が伊豆の国府（三島）に近く、肥沃な狩野川流域平野に位置し、伊豆から駿河に進出する地点を擁し、中央の情報を得るに便宜のある、いわば伊豆国の要衝ともいえる地方であったことや、国衙機構を通じて、中央と密接な関係をもちうる在庁官人たる時政が、その思想や行動の上から推して、当時一般の東国武士とはかなり異なった性格をもっていたことを推測。そして、時政は頼朝の拳兵以前に、何度か京都に上っていたと思われ、また平氏と近い関係にあったとし、天台座主明雲が伊豆に配流される途中に延暦寺僧徒のために奪回されたという事件の情報などから、中央政界の混乱と政治権力の弱体化とを正

確に看取したに違いないと見る。

挙兵後の時政については、山本館襲撃の攻撃軍の指揮をとったことを指摘。その後、甲斐・駿河地方に赴いて、この地方の源氏勢力を組織し、頼朝が黄瀬川まで進んできた時に信濃源氏をあわせて、約二万騎の軍勢を率いて参会したという事実から、その戦略家としての側面を評価する。

義仲追討から平氏追討の期間、時政は戦陣に臨むことがなかったが、これについて安田は、時政は頼朝と共に、つねに鎌倉にあつて、東国政権樹立のための籌策をめぐらしていたという理解を示す。しかし、義経が退京すると、頼朝は自身のかわりに北条時政や土肥実平を京都に送った。そして一族を相具して入洛した実平に続いて、時政は千余騎を従えて京都に入ることになるが、『玉葉』の「近国等、件の武士（時政）の進止たる可きの由、閭巷謳歌す」という記事から、この際、時政はかなり大きな権限を頼朝から与えられていたことを推測する。

京都守護としての時政について、安田は『吾妻鏡』文治二年（一一八六）三月二十三日条の記事を根拠に「その施政はすこぶる公平無私で、公家側の人々からも好感をもたれていたようである」と評価する一方、「時として彼が独断専行する如き状況もあつたが、それでも結局は、頼朝の強い意志の前に、時政の意志は屈服せざるを得なかった」と頼朝の方針との齟齬も指摘している。

頼朝の死後、時政が幕政を領導するに至る事情については、大江広元との接近を重視し、また背景として、幕府の宿老、挙兵以来の功臣の病没が続いたことをあげ、正治二年（二二〇〇）四月、従五位下遠江守に叙任されたことをもって、彼が形式的身分において、源氏一門と同格になったと理解する。

時政の失脚につながる平賀朝雅の將軍擁立については、朝雅が頼朝の猶子であつたことを述べ、実朝謀殺の陰謀に時政が加わつたことについては、『保暦間記』の「時政、此事争力知ラザルベキナレドモ、女性ノ計ニ付ケルカ、

老耄ノ至カ、不思議ナリシ事也」という記事をあげて、従来から種々の疑問がなげかけられていることを指摘する。そして、彼がこうした行動を起こした条件として義時・政子らとの政治的対立を指摘する。時政は比較的保守的で、とくに対京都策において頼朝時代の方策をすて切れない立場にあり、これが朝雅や牧の方の野望と結びついたというのである。

(五) 河合正治

河合正治は、精神文化の側面から武家社会の実態を解明した研究者で、その成果は『中世武家社会の研究』（吉川弘文館、一九七三年）に示されている。河合がそうした視角を踏まえて時政の実像に迫ったのが「執権北条時政」（安田元久編『鎌倉將軍執権列伝』秋田書店、一九七四年）である。

河合は時政の内面に踏み込み、同じ伊豆の武士で平家方に立った伊東祐親と比べて、「胆力もあり時勢の変化を見抜く俊敏さももった人物であったのであろう」と捉える。そして、頼朝挙兵以前、伊豆の諸豪族は伊東氏をはじめ藤原姓で、平姓である北条氏の同族はないが、最初の妻が伊東入道の娘であっただけでなく、時政が伊東祐親の孫にあたる曾我兄弟の宿所への参入を許し、弟時致の名付親になったことなどから北条・伊東氏の深い因縁を看取する。

牧の方については、彼女の父宗親が牧司として管理にあたった大岡牧が北条の西隣に位置することを示し、時政と牧氏は地方における交際関係で接近したとみるが、その一方で、牧氏が京都の官吏で、その一族の氏神が京都にあったことをから、それによって時政が一段とぬきんでた中央情報の把握を可能にしたとする。

頼朝は甲斐源氏の一族と連携する必要を拳兵のはじめから考えており、時政はその連絡のためにみずから甲斐国

に出向くことを予定していたとみる。また文治元年の上洛についても、「頼朝から重大使命を託されて上洛」し、「京都の公家たちを瞠目させるような精力的な活動を行な」った、と時政の政治力を高く評価するとともに、この時の時政の有した七カ国の惣追捕使兼地頭などの権限を分析し、「この時期の時政は京畿において絶大な権限を握っていた」と述べ、また、逮捕した群盗を検非違使庁に渡さず、直ちに六条河原で斬首した時政の檢察行為を「機敏であざやかであった」とする。さらに、時政の関東帰参後、その目代として活動した時定にも注目し、その在京活動が六年にも及び、この間に北条氏の勢力が京畿に扶植されることになったことを指摘している。

九条兼実の日記『玉葉』に見える「頼朝の妻の父、近日の珍物か」「田舎の者もつともしかるべし、物体はなほ尋常なり」という時政の人物評については、「これは根っから時政を馬鹿にしているのではなく、近日の珍物というのも、近ごろ珍しい硬骨漢というほどのことであり、そのふるまいも田舎者ではあるが、なかなか尊大ぶっているとあるといっているのであろう」と好意的に評価している。

時政の伊豆における所領は本拠の寺宮荘が中心であったが、文治元年（一一八五）にはすでに同国守護職を得、国衙も支配下におさめ、一宮三島神社の神事や願成就院の修正会以下の仏事の執行権も握った。駿河においても守護職につくと共に国衙領も支配し、遠江国では蒲御厨の地頭職をもっていた。文治二年、時政の目代で牧の方の外甥にあたる高成が越前の国務を妨げていると訴えられるが、時政は同国の最勝寺領大蔵荘にも地頭職を帯していたから、越前国に勢力を扶植していたことも明らかであるとし、さらに、肥後国阿蘇荘に対して預所職と地頭職を兼ねる強力な権限をもっていたことも推測している。

頼家の親裁は、前代からの政所別当大江広元と侍所別当梶原景時が制度的に支えたものであった。時政は、御家人たちから強い反感をかっていた景時は抹殺することができた。時政が威嚇と懐柔によって広元を自己の陣営に引

き込んだのは比企の乱の時であった。これによって時政は広元と並んで将軍家政所の別当となるが、広元はただ員にそなわるだけで、最高権限が時政ひとりにあつたことは幕府文書の様式からも察せられると述べる。また、時政時代の北条氏はまだ侍所別当を兼任していなかったが、同別当の和田義盛はすでに時政の驅使に甘んじていたことを指摘する。

牧の方による陰謀事件については、時政は「情にひかれただけで同じく娘婿である重忠の討滅を計るほど毫碌していたとは思われない」と見て、『明月記』の「時政の嫡男義時が時政に背いて、將軍実朝母子と同心して、継母（牧ノ方）の党を滅ぼしたのだ」という記事に真实性をみると、「時政が將軍を積極的に実朝から朝雅に代えようとしていたことは考えられず、むしろ義時がこれを口実に政権を奪取した」と考え、その背景として時政が幕政を掌握する際には義時の絶大な援助を得たにも拘わらず、時政は義時に重要な政務を預けようとせず、牧の方の一族や娘婿を重用するようになったことを指摘。この政変の直後に謀叛者として名を挙げられている時政の娘婿の宇都宮頼綱もその同類と見なしている。

(六) 福田以久生

静岡県沼津市の高校に勤務し、地元の研究者としての立場から「郷土史家や好事家たちの百鬼夜行の如き非学問的発言や発想を、学問的・実証主義的検証によって洗い直」す作業を進めた福田以久夫の静岡県中世史に関する研究は、大著『駿河相模の武家社会』（清文堂、一九七六年）にまとめられている。その第Ⅱ部第六「鎌倉幕府の成立と沼津地方」に北条時政と牧の方についての論評がある。

まず、北条氏系譜検討の材料として熱海市伊豆山の「走湯山縁起」に「天禄四年北条大夫平時直為願主延教為勸

進、建立宝塔一基」とあることを紹介し、ついで、挙兵後の時政の行動や牧氏に關係して以下の点を指摘する。

山木討ちの際、時政は工藤も含む全軍の指揮を執る。山木の後見、堤權守信遠の討伐は時政の指示による。石橋山合戦の後、加藤景員以下光員・景廉らは大岡庄へ向かっている。時政は甲斐源氏との連絡をはかり、十月十八日、黄瀬川で甲斐・信濃の源氏、北条父子二万騎が来応し、加藤景廉も参会。頼朝と甲斐源氏との共同体制を作り上げ、その後、甲斐源氏が西上している間に、この地方の経営に従事して、頼朝の勢力を東国より東海にまで拡大したのは、北条時政の政治力による。その組織力が奏功するだけの条件が、かねてから時政と駿東・富士・甲斐方面の領主との間に発生していたとみるべきである。亀ノ前事件の時の時政の態度は頼朝に自己の立場を認識させずにはおこなぬ政治的配慮による。牧武者所宗親は勝長寿院供養の際に随兵。文治五年（一一八九）、牧五郎政親が將軍の御氣色を蒙り、時政に預けられている。比企能員討伐の際には、大岡判官時親が死骸の実検に遣わされている。牧氏事件で時親は出家。牧ノ方は伊豆に流されたが、『保暦間記』によると行方知れずになる。その後、『明月記』嘉祿三年（一二二七）正月二十三日条に在京の記事がある。

以上、北条時政に関する先学六人の見解を要約した。ここで示された意見に検討を加え、着目された事実をもつて成立期の北条氏ないし時政のイメージの再構築に資したいと考える。

（二）大森金五郎の見解は、『吾妻鏡』の記述に全幅の信頼を置いていることに限界が認められるが、北条氏ないし時政に関する評価は客観的で妥当なものと思われる。牧氏の勢力、曾我兄弟の仇討ち事件と時政の關係、実朝の配偶者選定における牧の方の役割など、今日の研究水準に照らしても齟齬を生じることがない。また、失脚時における時政の心境に関する指摘は首肯すべきものがある。

(二) 佐藤進一の時政に関する評価は、石井進がその一般向けの名著『日本の歴史7 鎌倉時代』(中央公論社、一九六五年)で、これに賛意を示して全面的に踏襲したことなどから(二八六―七頁)、すでに權威ある定説となっているが、今日の研究水準からすると疑問に思われる部分が多い。

まず①であるが、頼朝拳兵の段階において、ただ「北条四郎」のように名字プラス輩号を名乗る武士にも国衙最有力在庁が存在した事実がある。たとえば、河越太郎重頼は武蔵国留守所惣檢校職、小山四郎政光は下野大掾(権大弼)職を帯していたことはよく知られるところである。また、平家政権の「東国の御後見」をもって任じた大庭景親も「三郎」でしかなかった。したがって、時政がただの四郎であるからといって、その存在を小さいものと評価することはできない。②の点は、在地への進出の時期が考慮されるべきであろう。この点については前稿で詳しく述べたところである。③については、三浦・千葉氏などもその所領が拡大するに伴って京都や西国から吏僚や被官を採用しており、彼らが家政機関の実質的な担い手になっていくことは近年の諸研究において明らかにされたところである^①。

かくして、佐藤の意見は三点ともに実証的に成立しがたい。ただ、北条氏が千葉氏など古くから東国に土着していた「豪族の領主」と異なる性格を有する存在であることは間違いない。しかし、前稿で指摘したように、北条氏は所領開発型の武士ではなく、伊豆国衙に政治的基盤を置くとともに中央の権力と深い関係を結び、伊豆国随一ともいえる交通・流通の拠点に本拠を置く有力な存在ではあったのである。

(三) 上横手雅敬の北条氏に対する評価は、この書が執筆された当時、学界に支配的だった領主制的側面からのものではなく、普遍性のあるすぐれた政治史の視角に基づくもので、北条氏の土着時期が古いものでないとし、また京都との深い関係、開明性を指摘した点で、今日の問題意識の先駆をなすものといえ、その慧眼には敬服せざる

を得ない。

(四) 安田元久は、時政と京都や平家との関係をさらに具体的に説明し、また時政が頼朝に深く信頼されていたことや戦略家としての側面も指摘する。時政の失脚が対京都政策におけるその保守性に起因するとしたことは注目されるが、これはやはり歴史の進むべき方向を武家が公家を凌駕することに見出そうとする領主制論的な認識によるものであろう。なお、時政が大江広元に接近したことを重視した点は(五) 河合正治によって、さらに深められることになる。

河合は北条氏の本拠周辺の勢力に目を配り、大岡牧の牧司牧氏の存在を重視する。また時政の政治力のみならず、その眼代となった時定の在京活動を評価。時政失脚の理由については、彼が義時を重要な政務から排除し、牧の方の一族や娘婿を重用したことを挙げている。

(六) 福田以久生は地元の研究者の立場から、拳兵時における時政の戦略、大岡庄の存在を評価し、頼朝と甲斐源氏との共同体制の樹立が時政の政治力によるものとする。



発掘調査中の北条氏邸跡（2006年2月28日、岩田慎平氏撮影）

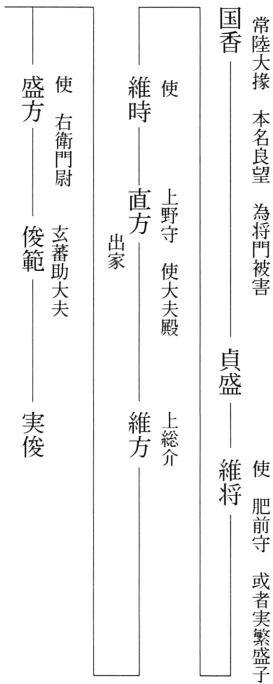
また、大岡時親など牧氏一族の動向に注目する。

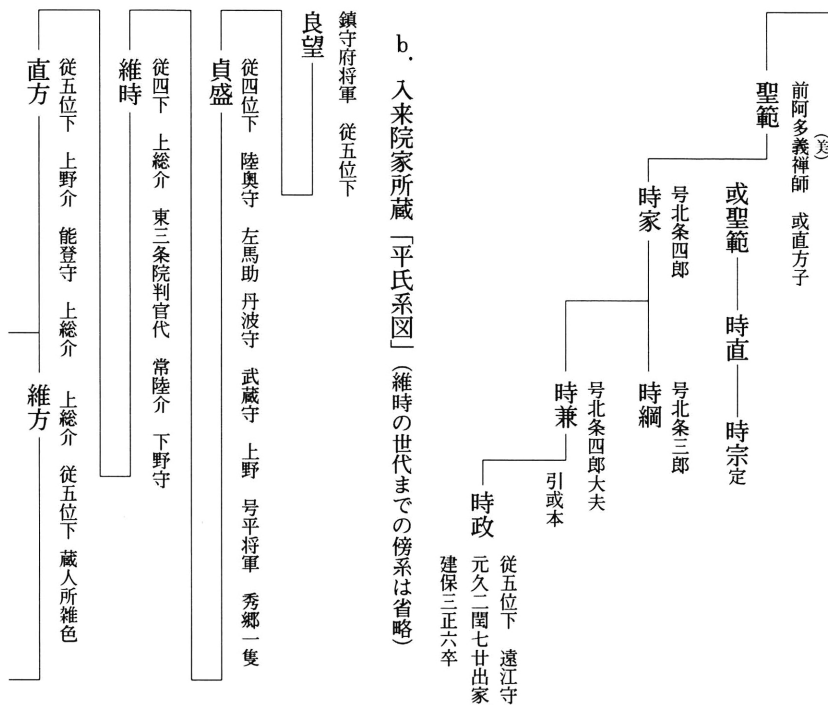
以上の検討から、頼朝挙兵以前から時政の時代における北条氏について課題とすべきこととしては、①出自・系譜Ⅱステイタス ②国衙との関係やその近傍に位置する伊豆北条の空間の特性 ③牧氏（大岡氏）の存在形態 ④時政・時定の在京活動 ⑤時政と大江広元ら京下り吏僚層協調の背景 ⑥時政失脚の背景 などが浮かび上がってくる。このうち、⑤⑥を除いては前稿でも触れるところがあった。しかし、①については、近年学界に紹介された中世に成立したことが明らかな北条氏系図の提示を省略に委ねていた。そこで、次の第二章においてはその点を補い、第三章ではそれ以外に関わる、目下のところ明らかにしうる点について述べていきたいと思う。

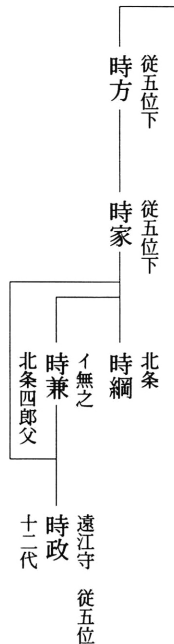
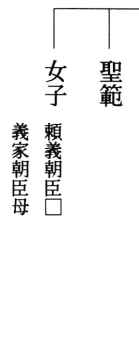
二 中世成立の北条氏系図の比較と検討

まず、前稿において存在の紹介のみに留めた中世成立の諸系図に見える伊豆北条氏の世系を以下に示すことにする。

a. 中条家文書「桓武平氏諸流系図」（維時の世代までの傍系は省略）







c. 野辺文書「北条氏系図」(尻付一部省略 維方の世代までの傍系は省略)

常陸大掾

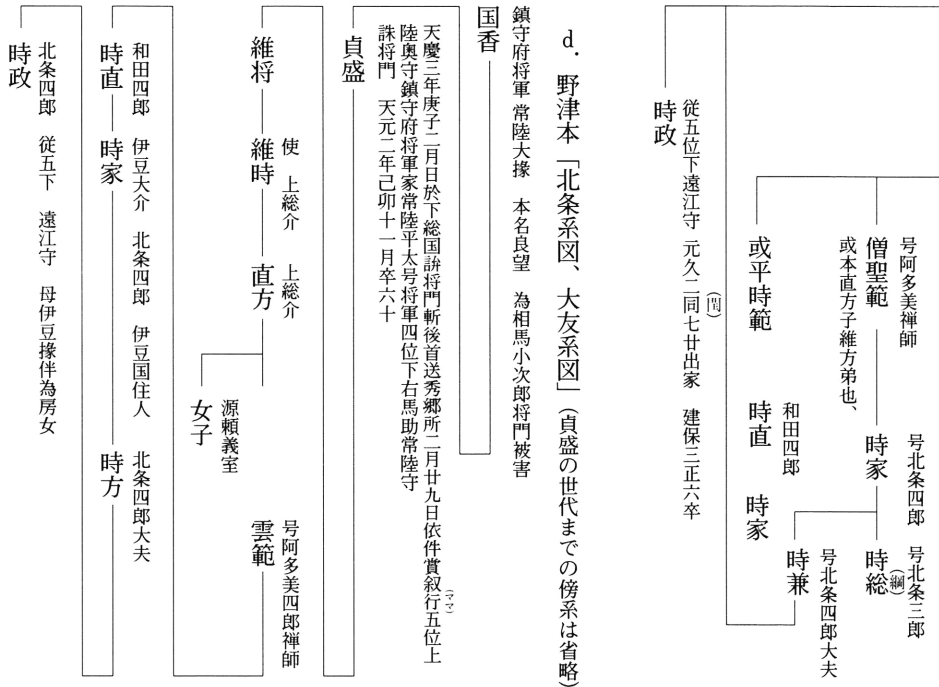
国香

鎮守府將軍 四位陸奥守 數国守也、天元二年卒
貞盛

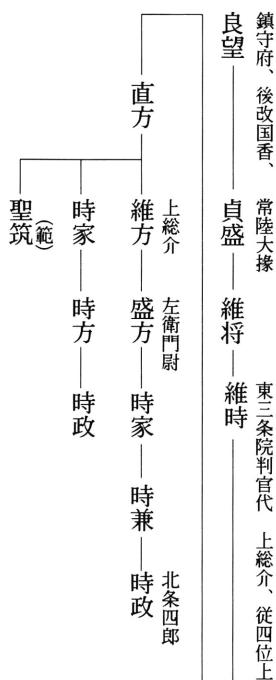
肥前守卒 使 或云、実繁盛子繁盛者貞盛弟也、
維将

四位上總介 使 上野守 使 出家 上總介 使 大夫尉
維時 直方 維方

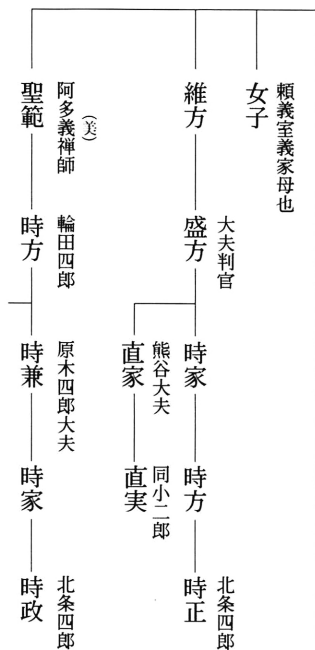
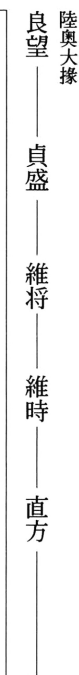
使 左兵衛尉
盛方 俊範 実俊

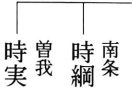


e. 妙本寺本「平家系図」(直方の世代までの傍系は省略)

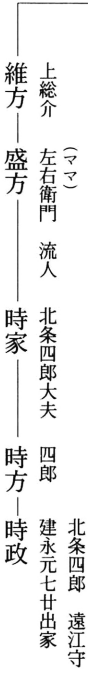
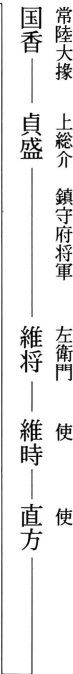


f. 正宗寺本「先代一流」(尻付一部省略 良望の世代の傍系は省略)

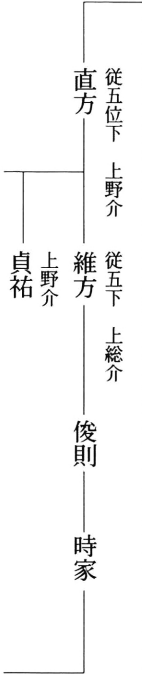
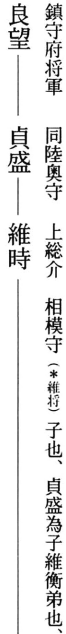




g. 正宗寺本「北条系図」〔尻付一部省略 維時の世代までの傍系は省略〕



h. 山門文書「山門氏系図」〔尻付一部省略 維時の世代までの傍系は省略 *は野口注〕



鎮守府將軍賴家朝臣上(義)
女(マ) 義家朝臣母(マ)

時方 — 北条四郎 関東執權始 從五上 遠江守
時政

i. 「平姓指宿氏系図」(二本あるが、世系は同じであるので一本のみを掲げる。維時の世代までの傍系は省略)

本名良望 天元二五卒、年六十九 實繁盛子 士之使(マ)
常陸大掾 字常陸平太 陸奥守 前肥前守 從四位上
国香 — 貞盛 — 維将 — 維時 — 直方
從四下 相模殿先祖

維方 — 時方 — 時兼 — 時家 — 北条介 号北条四郎大夫 伊豆大助 北条四郎 後遠江守
時政

j. 『延慶本平家物語』(維時の世代までの傍系は省略)

鎮守府將軍 内將軍(マ) 上総介 從四下 從五上 使
良望 — 貞盛 — 維時 — 直方

從五上 和田四郎 号北条四郎大夫 北条四郎 遠江守
維方 — 時方 — 時家 — 時政

k. 『尊卑分脉』（直方の世代までの傍系は省略）

常陸大掾 鎮守府將軍 本名良望 為將門被害

国香

鎮守府將軍 陸奥守從四下 左馬助 号平將軍

貞盛

使 大夫尉 常陸介 從五上 筑前肥後守 天元四四卒

維將

使 上總介 肥前守 從四下 貞盛朝臣為子 使 大夫尉 上總介 從五上

維時

直方

使 上總介 從五上 左衛門尉

維方

盛方

阿多見四郎禪師

或本無シ

從五下 伊豆介 北条四郎大夫 聖範子云々

聖範

時直

時家

源賴義朝臣室

女子

北条三郎

時綱

從五下

元久二閏七廿出家 明盛 建保三正六卒 七十八才 号北条四郎 遠江守從五下 関東執事第

時方

時政

まず、これらの系図（北条氏関係部分）が所収ないしは紹介されている論文・史料紹介・資料集を左記に示しておく（なお、a・c・d・f・g・kは、既に北条氏研究会「北条氏系図考証」（安田元久編『吾妻鏡人名総覧』吉川弘文館、一九九八年）において考察の対象とされている）。

a 白根靖大「中条家文書所収「桓武平氏諸流系図」の基礎的考察」（入間田宣夫編『東北中世史の研究 下巻』高志書院、二〇〇五年）。

b 山口隼正「入来院家所蔵平氏系図について（上）（下）」（『長崎大学教育学部社会科学論叢』第160号・第161号、二〇〇二年）。

c 『宮崎県史 史料編 中世Ⅰ』（一九九〇年）。福島金治「野辺本北条氏系図について」（同書付録の「宮崎県史しおり」に収録）。

d 田中稔「史料紹介 野津本『北条系図、大友系図』」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第五集、一九八五年）。

e 『千葉県の歴史 資料編 中世3（県内文書）』（二〇〇一年）。

f 常州増井正宗寺蔵書四冊之内「諸家系図」（『東京大学史料編纂所影写本』所収。立花美香「伊豆北条氏」の存在形態について―時政を中心に―」（『京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』』第四号、二〇〇六年）。

g 同右。

h 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ六』（一九九六年）。

i 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ十』（二〇〇五年）。

j 横井孝「延慶本平家物語附載系図について」（『季刊ぐんしよ』再刊第八号、一九九〇年）。

k 『新訂増補国史大系』（吉川弘文館、一九七四年）。

a・kを一覧して先ず明らかなことは、時家から時政までの三代がほぼ一致するということで、時家以前の不一致は佐々木紀一の指摘した時家の伊勢平氏からの婿入り説（『北条時家略伝』『米沢史学』第一号、一九九九年）の傍証となる。dの「伊豆国住人」、d・iの「伊豆大介（助）」、Kの「伊豆介」という時家に関する尻付（注記）にも注目したい。また、時政の父として所見する時兼・時方が、系線に変則的な部分の見られるb・e・fとiを除いて、同じ系図に重複してあらわれないことから、両者は同一と考えられる。とするならば、時政の父は時兼と見てよく、これと『吾妻鏡』建久四年二月二十五日条の記事を総合すると、平六時定は時政の弟ということになる。

次に注目されるのは、c・dの時直、f・jの時方に「和（輪）田四郎」、fの時兼に「原本四郎大夫」、時綱に「南条」、時実に「曾我」の注記がみられることである。このうちfの系図は熊谷氏を組み込む作偽がほどこされていることから、信憑性に疑問がもたれるが、時政以前における北条氏庶流の存在とその領主的規模を推測する材料にはなるであろう。

時家以前の世系については、諸系図間に直方の子の世代から多少の不一致が見られるが、直方系との断絶を物語るほどのものはないと思われる。北条氏が源頼義を婿に迎え、義家の外祖父となった直方の直系であることを武家としての正当性・正統性の根拠にしていたことは、すでに複数の旧稿で指摘したところだが（『国家と武力―中世における武士・武力』『歴史評論』五六四号、一九九七年 など）、北条氏が広く鎌倉御家人から直方系と認識されていたことは、iの維時（直方の父）に「相模殿先祖」と注記されていることから傍証されるであろう。ちなみに、鎌倉時代に成立したことが明らかな『神代本千葉系図』（鍋島文庫本『千葉系図 全』）は、維時の実父とされる維将に「鎌倉御一門先祖」、その従兄弟の維衡に「平家先祖」の尻付を付し、両者を並べてレイアウトしている。

三 北条時政の係累

(一) 北条時定と服部時定

時政以前の北条氏を評価する上で一つのポイントになるのは、時政の腹心とされる時定の問題である。『吾妻鏡』建久四年二月二十五日条に、時定は「北条介時兼男」とある。杉橋氏はこれをもって彼を北条氏の嫡流と見るのだが、右に見たとおり史料価値の高い系図は一致して時政の父を時兼としているから、その腹心で「眼代」をつとめた時定は時政の弟と見るのが順当ではないだろうか。時政の居館の立地は交通・軍事などあらゆる側面において当時の伊豆国内随一といえるものがあり、その点からも時政が北条氏嫡流であつたことは動かないと思う。前稿でも指摘したように、おそらく時定は頼朝拳兵以前から北条氏の在京活動をになう役割をはたしていたのであろう。時定は『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）八月二十日条の頼朝の拳兵に従つた者の交名に名をあげられているが、『延慶本平家物語』第二末の交名には所見せず、『吾妻鏡』に次に所見するのが、文治二年（一一八六）三月二十四日条であることから、頼朝拳兵前後においては伊豆不在の可能性が高いのである。

ちなみに、時定の後、北条氏在京活動の担い手となつたのが時房と考えられることについては拙稿「承久の乱における三浦義村」（『明月記研究』第一〇号、二〇〇五年）で関説したところだが、『百二十句本平家物語』巻第十二（『新潮日本古典集成 平家物語 下』三五二頁）に、源行家追捕のために「北条の子息時房」が摂津渡辺に下つたという記述が見えている。時房が元服したのは文治五年（一一八九）四月十八日のことで、しかもその時の名は時連であつたから（『吾妻鏡』）、これは事実ではなく、覚一本でも時貞（時定）になっているのだが、ここに時房が登場するのは故なきものではないと思う。

ところで、私は前稿において北条氏と伊勢・伊賀平氏との系譜的近接を憶測したが、その傍証は時定からも指摘

することが出来る。すなわち、『百二十句本平家物語』巻第十二(同)に、

信太の三郎先生義教は伊賀の千戸といふ山寺におはしけるが、当国の住人服部平六時定といふ者に取りこめられて、自害してんげり。服部やがて首を取り、鎌倉へ下る。この服部と申すは、平家伺候の者なりしが、本領伊賀の服部をぞ返し賜びにける。

とあり、ここに見える服部平六時定が北条平六時定に同定されるからである。宝賀寿男編『古代氏族系譜集成』中巻(古代氏族研究会、一九八六年)の八一〇ページに示された「伊賀ノ服部氏」の系図には、服部氏の初代として服部連時定(服部六郎 服部庄下司)があげられ、「平家物語、志田義憲ヲ討ツ」「東鑑、文治三年七月、平六兼仗」と注記されている。

無論、この『百二十句本』の話は事実と相違しており、『吾妻鏡』によると義教(義範・義広)は元暦元年(一一八四)五月四日に伊勢国羽取山において波多野盛通・大井実春らと激戦の後に討たれている。おそらく、この事件と、後に北条時定が畿内近国で謀反人の探索に当たった事実が混同されて、このような話が成立したものとみられよう。「羽取」が「服部」になり、それゆえ伊賀で発生した事件ということになったと思われるのだが、そこに北条時定が服部氏として登場することが問題で、やはり北条氏と伊賀・伊勢との由縁を想像しなくなるのである。

ちなみに、伊賀服部氏の系譜は、池家(池禪尼・平頼盛)の家人で、平治の乱後、源頼朝を逮捕したことで知られる平宗清の子孫と時定の子孫が融合するような形で伝えられている(宝賀編前掲書参照)。杉橋隆夫は、平治の乱後、清盛との相剋を見据えた池家が、将来に亘る政治的カードとして頼朝の身柄の確保をはかり、伊豆に流した頼朝の

監視を北条氏にあたらせたと見るが（牧の方の出身と政治的位置）上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年）、この杉橋の推測と平宗清と北条時定の所伝上の親近の整合は何とも示唆的である。

前稿において私は、伊豆北条氏に婿入りした時家が伊勢平氏の系譜を引き、興福寺の悪僧信実と姻戚関係を有したことが、時政・時定の伊賀・伊勢・大和における活動に寄与するものがあつたことを推定したが、それは伊紀にも敷衍できるように思われる。例えば、文治二年（一一八六）九月、檢非違使北条時定の代官が、後白河院の召使に随行して同国の蓮華王院領広由良庄に赴いて濫妨停止にあたっているが、その濫妨を行った吉助なる者は、伊賀平氏の一族で平家の有力家人である平貞能の郎従の弟であつた（上横手雅敬「吾妻鏡文治三年九月十三日条をめぐる諸問題」『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、一九九一年、初出一九七五年）。また、紀伊湯浅氏と関係の深い明恵の父平重国は伊勢伊藤氏の出身で養父の平姓を称し、平重盛の家人となり、平家の有力家人で上総介に任じた伊藤忠清の目代として東国に下つていたことにより、治承四年、頼朝に応じた反乱軍に討たれたと考えられる存在であつた（拙稿「源頼朝の房総半島経略過程について」『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九八五年）。

時政・時定の在京活動は、畿内近国に張りめぐらされていた時家の係累によるネットワークに負う部分があつたのではないだろうか。あるいは、当地方に時家から伝領した所領を有していた可能性も認められよう。この推測は右に見た服部氏始祖伝承成立の背景とも整合する。ちなみに、前稿において『源平闘諍録』が時家の祖父とする盛基の子孫の多くが「時」を名の通字としてしていることについて触れたが、『本朝世紀』久安五年（一一四九）四月九日条の小除目の記事に、

因幡権守從五位下平朝臣時房

内給成功者也
近江国住人云々

と見える時房も、その一族の可能性がある。盛基の子孫が伊賀に所領を有していたとすれば、北に隣接する近江への進出も容易に想定できるからである。

以上、時家の伊勢平氏出自説に乗じて、後考にそなえるためとはいえ、実証をはるかに逸脱した推測を提示した。批判・教示を請うところである。

なお、時定に関する知見として「葛山家譜」〔裾野市史〕第二卷 資料編 古代・中世別冊付録「中世系図集」一九九五年 収録〕に、彼の妻が中四郎維重の姉であったという記事が見えることを付け加えておきたい。維重（惟重）は伊豆配流中から頼朝に仕えた吏僚であり、石橋山合戦の際には以仁王の令旨をつけた旗を掲げていたことが知られる（『吾妻鏡』 治承四年八月二十三日条）。

（二）牧氏（大岡氏）一族とその本拠

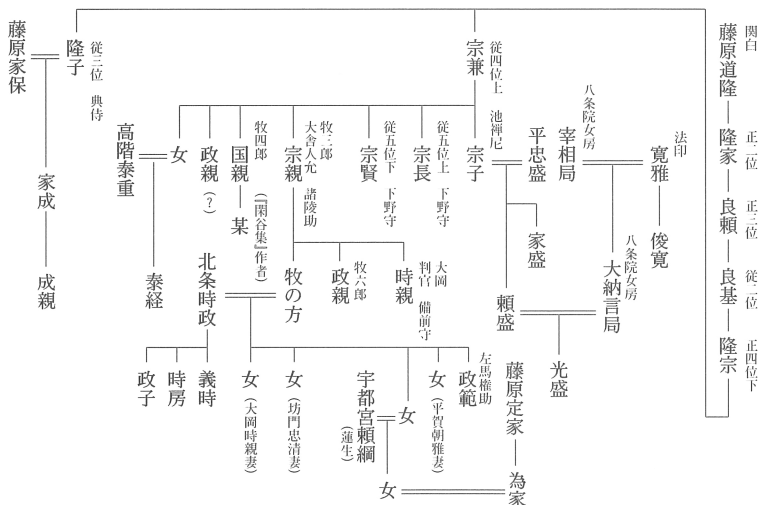
頼朝挙兵前後の北条氏の政治的ステイタスや存在形態を考える場合、時政の後妻牧の方およびその一族の評価が決定的な意味を持つことは言うを俟たない。杉橋隆夫の「牧の方の出身と政治的位置」は、そこにメスを入れた画期的な研究であった。しかし、牧氏が平忠盛の正室藤原宗子の一族であることについては多くの状況証拠からその蓋然性を認めたいが、時政と牧の方の結婚の時期を平治の乱以前にまで遡らせたことについては、前稿でも述べたように、私には疑問を払拭することが出来ない。

ところで、すでに『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』（二〇〇四年）第二編第五章「荘園制の確立と武士社会の到来」（杉橋隆夫執筆）に紹介されたところだが、最近になって牧氏の文化レベルにおける貴族的性格を示す貴重な成果が国文学者浅見和彦によって示されている（『関谷集』の作者「西行の周縁・実朝以前として」）有吉保編『和歌

この論文によると、鎌倉初期になった歌集『閑谷集』の作者は『鎌倉年代記』に建久三年（一一九二）の「六波羅探

題」として所見する牧四郎国親の子息に比定され、彼は養和元年（一一八二）二月ごろ加賀にあり、同年十月ごろ但馬に移つて翌春のころまで滞留していたが、文治元年（一一八五）八月、牧氏の本領で平頼盛領であつた駿河国大岡庄（牧）内の大畑（現在の静岡県裾野市大畑）に庵を構えるにいたる。そして、そこには都よりの知人も立ち寄り、また涅槃会・文殊講などの法会が執り行われ、あわせて歌会も開かれていたというのである。

さらに、これも『沼津市史』において杉橋の紹介するところだが、右の浅見の指摘に符合するかにように、裾野市の大畑遺跡の上屋敷地区からは平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構群が検出されている。ここでは、小鍛冶、銅鋳物製造を目的とした工房や南北十間・東西三間という壮大な建物跡が確認されており、遺物においては手づくね成形の土器や舶載陶磁器の豊富さが指摘されている。さらに、



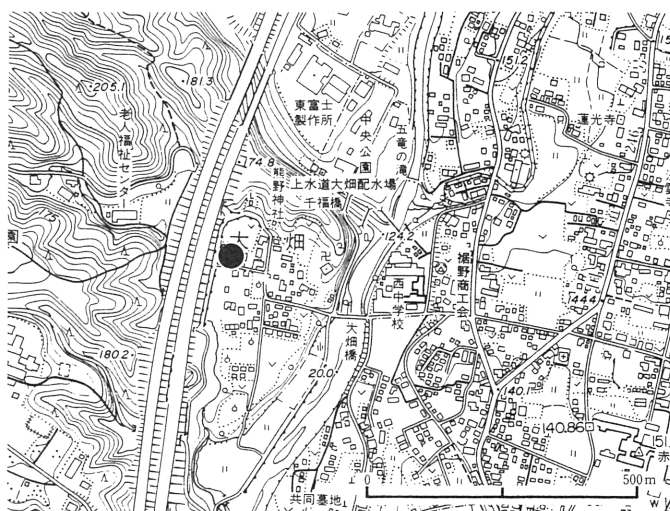
102

隣接する大畑経塚でも、十二世紀後半から十三世紀前半期の常滑古窯産の埋蔵用の大甕破片が出土しているという(以上、『裾野市史』第一巻 資料編 考古、一九九二年)。

これらの事実から、牧(大岡)氏本拠の空間が、交通・流通の拠点として積極的に京都文化を受容しうる場であったことが明らかになった。大岡庄大畑は佐野川と黄瀬川の合流する地点の南西に位置し、現在でも東名高速道路の通過する交通の要衝であって、伊豆北条と多くの共通性を有する空間といえる。

本拠の様態から、牧(大岡)氏のイメージもかなり具體的なものになってきた。浅見は右の論文で、京都を故郷とする『閑合集』の作者(牧四郎国親の子息)が、平家のために各地を移動しながら地方支配や情報収集に関与していたことを示唆しているが、そのような人物を一族にもつ牧氏と、これまた京都と緊密なつながりを有した北条氏は、所領が近接することも相俟って深く関係していたのである。

元久元年(一二〇四)十一月、時政と牧の方の間に生まれ



大畑遺跡の位置〔『裾野市史』第一巻(資料編 考古)より〕

た政範が僅か十六歳で没した時、『閑合集』の作者は政範を「木高き花影」と呼んで、その死を泣嘆している。政範はこの時すでに従五位下左馬権助の官位を帯しており、いずれは兄義時と北条氏家督の地位を争うことになることは火を見るよりも明らかな立場にあった。^③『吾妻鏡』文治元年十月二十四日条には牧宗親が「北条殿御代官」と見えるが、時政は牧の方の外甥にあたる越後介高成を越前国国地頭職の「眼代」に補するなど（浅香年木『治承・寿永の内乱論序説』法政大学出版局、一九八一年、三四七―八頁）、牧の方の一族を盛んに登用している。

義時・政子による時政・牧の方追放事件は、ひとえに義時系の北条氏嫡宗権確立Ⅱ牧の方関係者の幕府政治からの排除という点にその政治史的意義を求めるべきであろう。

(三) 『吾妻鏡』における牧宗親と大岡時親

ところで、頼朝拳兵以前において牧氏の政治的・社会的なステイタスは北条氏よりも上位にあったことは疑いないところであり、また頼朝拳兵に際しても、石橋山合戦の後に加藤景員らが「大岡庄を目指していることから、時政と同意していたと考えられるから、鎌倉政権の成立後に平家方として処分されたとは考えがたい」。

そこで問題になるのが、寿永元年（一一八二）十一月の亀の前事件における牧氏の位置である。まず、頼朝の愛妾亀の前が伏見広綱の家に囲われていることを政子に密告したのは牧の方である。政子は牧三郎宗親に命じて広綱の家を破脚させる。頼朝はこの件について宗親を召問し、宗親は謝罪するが、怒った頼朝に髻を切り落とされ、泣きながら逃亡する。一方、これを聞いた北条時政は頼朝の態度に腹を立てて伊豆に下国してしまう。

『吾妻鏡』に記されたこの痴話話のなかで納得できないのは、北条氏よりも高いステイタスにあり、牧の方の父である宗親がどうして政子に仕えるような境遇にあるのか。そして、たとえ頼朝の怒りを買ったとはいえ、当時の

社会における成人男子にとって最も恥辱とされるような羽目に陥らざるを得なかったのかという点である。

宗親が池禪尼の弟であるとするならば、かなりの年輩であることが予測できる。また、その官歴について『愚管抄』は大舍人允、『尊卑分脉』は諸陵助としている。ところが、亀の前の事件を記す『吾妻鏡』に、彼は「牧三郎」として登場し、文治元年（一一八五）十月二十四日条からは「牧武者所」となり、最終所見の建久六年（一一九五）三月十日条まで変わらない。大舍人允や諸陵助の官歴を有するものが武者所に補されることは考えがたく、ここには何らかの錯誤を認めざるを得ないのである。

私は『吾妻鏡』に「三郎」「武者所」として所見する「宗親」はすべて、本来その子息である時親にかかるものであると推測する。同書建仁三年（一二〇三）九月二日条に「判官」として初見する大岡時親を宗親と混同して伝えたものと考えるのである。この記事は『愚管抄』の「大岡判官時親とて五位尉になりて有き」という記事に符合する。ついで時親は『明月記』元久二年（一二〇五）三月十日条や『吾妻鏡』同年八月五日条に備前守として登場するが、武者所→判官→備前守という官歴は制度的にも年代的にも整合するところである。したがって、『吾妻鏡』に見える宗親の所見はすべて時親に置き換えられるべきで、宗親は頼朝拳兵以前に死没していた可能性が高いのではないだろうか。

むすびに

本稿第一章においては、諸先学による北条時政に対する評価を検討した。今日、学界の通説となつてゐる佐藤進一による評価について、その前提となる事実認識において誤りがあることを指摘したが、北条氏を三浦氏や千葉氏のような豪族的領主層の代弁者となる存在ではないとする結論は否定できないものがある^①。

北条氏が、所領や一族の広がりからすると小規模であるが、その開明性などの点において一般の東国武士とは異なつた性格を有することは上横手雅敬も指摘するところであつた。これは、伊豆北条氏の本格的な展開が、ちょうど源氏庶流に代表される京武者系豪族的武士の東国進出と軌を一にするかのように、伊勢平氏から入つた時家の代から開始されることによるものと見るべきであらう。その存在形態については前稿で述べたところだが、さらに付け加えるならば、最近、守田逸人が明らかにした、交通の要衝や流通拠点を掌握し、国衙行政に関与しながら一国規模で地域社会の担い手としての役割を果たしていたという、伊賀における伊勢平氏のあり方とオーバーラップするものが認められるように思う（「伊賀国における伊勢平氏の展開——莊園公領制成立期における現地社会の動向——」『ヒストリア』第一九五号、二〇〇五年）。時政や時定はどこに行つても国衙事務に対応できるだけの行政実務能力をもつ存在だつたのである^②。

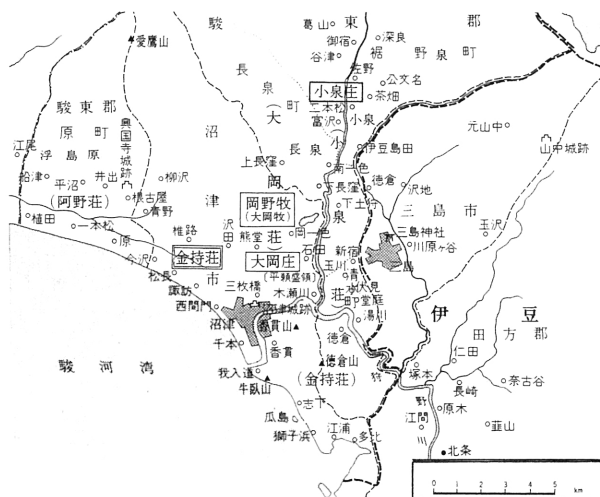
なお、大森金五郎の見解は、牧氏に対する低い評価は別にして、時政の評価につながる問題はすべて取り上げられて適切な指摘が下されている。戦後歴史学において、いささか軽視されていたきらいのある戦前の歴史学の成果に、大いに学ぶべき点のあることを再認識させる一例である。とくに、畠山重忠追討や牧の方による陰謀事件に際して、時政が自らの失政を自覚し、義時への期待を抱いていたことを示唆している点は、さすがに鎌倉時代史研究

の泰斗たる当該時代に対する深い認識に支えられた卓見だ
と思う。⁷⁾

第二章においては、知る限りの北条氏関係古系図に所見
する時政までの部分を抄出して提示した。これらを対比し
た結果、時家―時兼（時方）―時政の世系が共通すること
から、時政の「腹心」「眼代」として在京活動を行った時
定が時政の弟であった可能性が高いことが明らかにになり、
両者の関係は嫡庶というよりも分業とみるべきであること
を指摘した。

第三章では、時政ないし伊豆北条氏の存在形態を説明す
る上でポイントとなっている牧氏について、浅見和彦の研
究や近年における考古学的研究の成果を前提に、いささか
踏み込んで考察を加えてみた。『吾妻鏡』に所見する牧宗
親の所見はすべて時親に代置されるべきものであるという
推測を示したが、牧氏に関しては相変わらず蓋然性でしか
語ることのできない部分が多く、後考を期さなければなら
ないのは勿論のことである。

建久三年（一一九三）、六波羅守護人に牧国親が在任して



大岡庄とその周辺〔竹内理三編『莊園分布図』上巻（吉川弘文館、1975年）による〕

いることについては、上洛時に使用する頼朝の御所が六波羅の池殿（頼盛邸）跡に造営されたこととの関連も含めて、平頼盛と幕府との間に介在したであろう牧氏の役割について考えさせられるものがある。

杉橋隆夫が指摘するように、牧氏の本拠である大岡庄の狩野川対岸の香貫の地が源義朝の乳兄弟であった鎌田正清の所領であり、正清の父通清を北条時政の烏帽子親とする所伝の存在すること、また、平治の乱後、頼朝の同母弟である希義がここに潜伏していたことも興味深く（「荘園制の確立と武士社会の到来」、北条氏や牧氏の在地における政治的スタンスについては、さらに追究の余地がのこされている）。

幕府成立後、大岡庄と境を接する金持庄を本拠とした金持氏は北条氏の被官として活躍するようになるが、平賀朝雅追討の際、朝雅に「宿意」をもっていた金持広親は大功をあげている。その「宿意」の背景として、金持氏と牧氏との間に在地におけるトラブルが存在した可能性が指摘されており（明月記研究会編『明月記』（元久二年五月～閏七月）を読む『明月記研究』一〇号、二〇〇五年）、これまた興味を引



北条氏邸跡背後の守山から富士山を望む（伊豆の国市教育委員会提供）

かれるところである。ちなみに、北条時家が伊勢平氏の出身であることや時定と伊賀服部氏に関する所伝を前提に考えると、平賀朝雅の守護としての伊勢・伊賀支配の背後に彼の舅である北条時政の支援が大きく与っていたという想定も可能かも知れない。

*

*

*

以上、前稿における伊豆北条氏考察の欠を補うべく、先学の見解に検討を加え、また新知見を紹介してかなりの想像を加えた私見を示してみた。覚書と題する所以である。

ところで、伊豆北条は美しい富士山が望めるところである。かつて京都大学で歴史地理学を講じた足利健亮は、徳川家康が江戸に本拠を置いた理由の一つとして「富士山が見える土地」であることを指摘している（『徳川家康の江戸遷地理由考』平成四・五年度科学研究費補助金研究成果報告書『計画都市の立地決定に至る意志及び経過の歴史地理学的再検討』一九九四年）。伊豆北条は伊豆の守護所や堀越御所、さらに後北条氏の韭山城など中世後期に至っても、伊豆・駿河・相模地方における政治権力の一中心としての機能を担っている。その背景として交通・流通の拠点というだけではなく、ここからの富士山の眺望が、まことに見事であることも付け加えるべきであるのかも知れない。

ここに掲載した写真は、北条館の背後にある守山山上からの眺望である。守山といえば『菟玖波集』に、

前右大将頼朝上洛の時、守山を過ぎける時、蓐盛りなるを見て、連歌せよと言ひければ

平時政朝臣

守山のいちごさしくなりにけり

むばらがいかにうれしかるらむ

とあるのが、想起される。守山の地名を養育する意味の「守り」、いちご（苺）を「市児」、さか（盛）しくを「賢しく」、むばら（苺）を「乳母等」にかけた唱句で、時政と頼朝の親密な関係を彷彿とさせるものがある。

注

(1) 三浦義村に右筆として仕えた「大学の民部」は、もと京都の久我家に祇候していた人物であり（拙稿「承久の乱と三浦一族」「三浦一族研究」第三号、一九九九年）、また十三世紀半ば頃、千葉氏の吏僚として活動し、日蓮のバトロロンとしても知られる富木常忍も、父蓮忍の代に因幡から下総に移住して来た存在であった（石井進「因幡から下総に移住した武士の訴え」『千葉県の歴史 資料編 中世2』一九九七年）。

(2) 京都大学大学院日本史研究室所蔵『六波羅守護次第』にも、建久三年の六波羅守護として牧四郎国親の名が挙げられている。なお、この『六波羅守護次第』は、熊谷隆之「六波羅探題任免小考」『六波羅守護次第』の紹介とあわせて」（『史料』第八巻第六号、二〇〇三年）に翻刻されている。

ちなみに、この牧国親に比定される「牧四郎入道」は、東大寺別当が東南院御坊法印（定範）の時、「関東御權威」によって美濃国大井庄地頭職に補されている（折田悦郎「鎌倉時代前期における一相論——東大寺領美濃国大井庄下司職相論——」川添昭二先生還暦記念会編『日本中世史論攷』文献出版、一九八七年）。

(3) 北条政範（政憲）は、元久元年四月十二日の除目で従五位下左馬権助に叙任されたが、これを記録した藤原定家は政憲につ

いて「近代英雄」と注記している（『明月記』同十三日条）。なお、義時が従五位下相模守に叙任されたのはその僅か一ヶ月ほど前の三月六日のことで（『武家年代記』）、ときに義時はすでに四十二歳であった。

（4）佐藤進一は『日本歴史講座』第三巻（河出書房、一九五一年）に収められた「北条義時」において、頼朝挙兵後の北条氏の

発展の根拠地が伊豆よりもむしろ駿河に移されたと考えられることや、義時の頃から奥州の辺境蝦夷地に発展していることなどから、いわゆる惣領制的支配に立つ武士団とは一律に断じ難いとし、また、文治元年当時、北条氏が早くも公文所を設けていたことを、一般の御家人には見られない性格を暗示するものと捉え、「北条氏の社会経済的ないし文化的条件がおのずから同氏の政治的立場を諸他の御家人と違ったものにしたのではあるまいか」と述べている。

（5）「京武者系豪族的武士」については、拙稿「豪族的武士団の成立」（元木泰雄編『日本の時代史7 院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年）を参照されたい。

（6）松島周一は、義経が退京した後、京都に乗り込んだ時政にとって、義経時代の支配秩序を清算するために国衙在庁の掌握が不可欠であったことを指摘している（『北条時政の京都駐留』『日本文化論叢』第九号、二〇〇一年）。すなわち、時政ないし時定は、頼朝の周辺において、畿内近国の国衙在庁の掌握を実現するのに最適任の人材だったのであろう。

（7）私は畠山重忠追討事件について、政子と義時は表面上は消極的に振る舞いつつも実はこれに参画していたものと推測したが（鎌倉武士と報復―畠山重忠と「俣川の合戦」―『古代文化』第五四巻第六号、二〇〇二年）、あるいは大森もそうように考えていたのかも知れない。

（8）外村展子『鎌倉の歌人』（かまくら春秋社、一九八六年）による。この時政の歌は『沙石集』（巻五）に梶原景時の作として収められているが、これは時政と頼朝に縁の深い「守山」の地名から、時政のものと考えるべきものと思う。

〔付記〕

本稿は平成十七年度 京都女子大学宗教・文化研究所研究助成による共同研究「中世における権門都市と地方都市の比較的研究」（研究代表者 野口実、研究協力者 花園大学教授 山田邦和）の研究成果に基づくものである。ほかに本研究の成果による刊行物としては、拙稿「中世前期の権力と都市―院御所・内裏・六波羅―」（高橋康夫編『中世都市研究12 中世のなかの「京都」』新人物往来社、二〇〇六年）がある。

なお、本研究を進める過程で伊豆北条氏関係遺跡の見学・調査を二〇〇六年二月二十六～八日、研究協力者の山田邦和氏および京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナールのメンバーの参加を得て実施した。その際、伊豆の国市教育委員会の池谷初恵氏・山田泰雄氏には北条氏邸跡（円成寺跡）・願成就院およびその周辺の史跡の御案内をいただき、また準備の段階から関連資料に関する御高配をいただくなど大変お世話になった。記してあつく御礼を申し上げる次第である。

〈キーワード〉

北条時政 牧の方 大岡庄 大畑遺跡